
世界樹の継枝

ヤグチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界樹の継枝

【Nコード】

N4503T

【作者名】

ヤグチ

【あらすじ】

空港で出会った少年に連れられて、辿り着いた先は世界樹を生命の源とする、異世界だった。

期間限定で異世界旅行を楽しむ予定が、いつの間にか訳のわからない役目を背負わされた主人公の放浪生活をお届けします。

世界の始まりは、一本の樹。

この世界に存在するのは、一本の樹だった。

いつから世界に存在していたのかは分からない。ただ世界には樹が存在していた。

その幹は太く、青々としたその枝葉は腕を伸ばすかのように大きく広がっていた。

しかし、その事を知る者は誰もいない。

世界に存在するのは、その樹だけだったから。

長い長い時、世界にただ存在していた樹は、ゆっくりゆっくりと自我を育てていた。

ある日、樹は自分に興味を持った。

しかし、世界に在るのは樹だけ。

その他になにも存在しない世界では、自分の姿を確認することもできない。

樹は枝に果実を実らせ、そこから光を生み出した。生まれた光が樹を照らし出すと同時にそこから闇が生まれた。

光と闇が存在するその世界で、樹は初めて自分の姿を見ることができた。

自分の姿を見た樹は、自分がただそこにあるだけの不安定な存在であることを認識した。

そこで、自分の存在を確立すべく、足元に大地を生み出しそこにし

つかりと根を張った。

根を張った樹は、それにより渴き枝葉が乾いた。

乾いた枝葉を潤すため、樹は水を生み出した。

水を得た枝葉は、再び青々とその枝葉を伸ばし、ぐんぐんと茂り潤った枝葉の擦れにより風が生まれた。

生まれた風は更に枝葉を揺らし、その擦れにより火が生まれた。大地に根付いた樹は、ぐんぐん大きくなり、やがてその枝に大小色とりどりの沢山の実を実らせた。

地面に落ちた小さな実からは植物や動物、昆虫などが生まれ、世界に彩りを加えた。

大きな実からは竜族が、風に揺られる実からは翼人が、大地に近い実からは獣人や人間が生まれ世界を賑わせた。

それぞれに番を得て子を作り、世界に広がる実より生まれし者たちを見て、樹は自分にも番が欲しくなった。

樹は自分の幹を分けて半身を作り出した。自分の番として。

1話 出会い

旅の始まりは、様々な人種が忙しく行き交う国際空港だった。

空港内を煌々と照らす明かりの中では時間の感覚が麻痺しがちになる。現在の時刻はとつくの昔に深夜を回っているが、この時間にもかかわらず、ここでは人の流れが絶えることはない。右へ左へ上へ下へ、老若男女、肌の色や髪の色、表情や服装も千差万別な人間がそれぞれの目的地へと移動する。

もちろん、私もその中の一人だ。

荷物をお供にエスカレーターで階下に降りながらぐりと空港を見回した。いろんな人が様々な背景を背負いながら流れていくのを眺めるのは好きだ。特に多数の人が行き交う空港はその最たるもので、見ているだけで気分が高揚する。

今、私がこの場所に立っているのは、仕事なんかじゃなくてプライベートな一人旅を楽しむためだ。

海外に行く機会は年に数回あるが、それは全部仕事柄みのものだった。完全にプライベートな旅行は、なんと2年ぶりだ。仕事が絡んでいないだけで、こんなにも乗り換え迄の時間が楽しくなると思わなかった。

ちろりと階下を覗くと、フリースペースでパソコンに向かいながら、険しい顔で電話をかけているビジネスマンが数名見えた。いつもはあちら側が自分のいる場所だった。

秋の連休の前後に有休をくっ付けて、二週間ほどの長さになった休暇を利用して、死ぬまでに見ておきたい場所の一つである世界的に有名な建造物を見るために、今からまた空路旅立つのだ。

この有休をもぎ取るために、連日連夜遅くまで残業をしていたし、出発当日も会社から直行できるぎりぎりの時間まで残った仕事を片付ける羽目になったが、それでさえ機内で寝るにはちょうどいいとポジティブに考えることができるほどに、かなり浮かれた状態であったのだ。

飛行機の乗り換えの時間を利用して空港外に出て一泊でもしようかと目論んでいた企ては、出発の遅れなどが重なり果たせそうになくなった。荷物を預けなおす必要があるが、そんな手間も些細なことに感じられるくらいに上機嫌だった。コロコロと音を立てる赤いスリッパの重さも気にならず、手に持った荷物さえも邪魔とは感じないくらい。

それでも、自分のこのテンションの高さが睡眠不足に起因していることは自覚できるだけの冷静さは残っている。

一人での旅行は初めてではないが、行く先は日本とは異なり安全であるとは言い切れない。不用意に気を抜かないように気をつけなきゃ、と自分に気合を入れて顔をあげた。

その視線の先にいた少年が、私を新しい世界への旅へと導いたのだった。

その少年は、様々な人種が忙しなく行き交う空港の中で、誰かを探すようにひたすらに人ごみを見つめていた。
その姿に何となく視線を引き付けられた。

迷子の旅行者：にしてはどこか違う感じがする。
どうしてそう感じたのだろうかとじつと少年を観察した。

まず目についたのは服装：身体を隠すように覆う真っ白の布地で仕立てられているのは、コートというよりはマントというのにふさわしい。

が、もともと多種多様な人種がいる場所だけに、これを違和感というにはインパクトに欠ける。

じゃあ、なんだろうと首を捻りながら立ち止まると、後ろを歩いていた人が怪訝な視線を向けて通り過ぎていった。それを見て、ようやくその原因に思い至った。

少年は、誰かを探している風なのに、一步もそこから動いていない。迷子になった場所から動かないことは迷子の鉄則であるが、地面に足が張り付いているように動かないその態度は少々行き過ぎたものであるように感じる。

そして気づいた最大の違和感。結構な人数が行き交っている空港の中で、その場に佇む少年の半径1m周辺には人がいなかった。

周辺の人々は、故意に少年を避けて歩いている風ではない。少年がいることなど認識していないように、誰も彼に視線を向けることも

なく自然に人が分かれていく。

…もしかして、わたし幽霊とか見ちゃってる？…

そう思った瞬間、不意にこちらに顔を向けた少年と視線が絡まった。

少年と目があつた瞬間、自分の周りから音が消えた気がした。

年のころは12、3であろうか。思わずぽかんと口を開けて見とれてしまうくらい、美しい少年だった。

どのくらい見詰め合っていただろうか。一瞬のようできて永遠にも感じられたその時間を動かしたのは、若葉のようなきれいな緑色をしたその少年だった。

緊張した面差しで少年は、一息を吸い込み、私と目線を強く絡ませたまま、聞き取りやすい言葉で「手伝ってもらえますか？」と小さく言葉を呟いた。

じっと見ていたことを見透かされているようで、気まずさに若干赤くなりつつも、まだ時間的に若干の余裕があることも手伝って、迷子（？）の少年にっこりとほほ笑みかける。

「どうしたの？誰かを探しているの？」

「一緒についてきてくれませんか？」

少年は、私の言葉に微かに安堵の表情を浮かべこちらを縋るように見つめ返してきた。

「いいよ。今から出国するの？」

もちろんの子供を見捨てて立ち去れるほど非道な人間でもないため、快く頷いた。

どの便かわかる？と言葉を続けながら差し出された手に触れた瞬間、周りが白い光に包まれて・・・

どこ？ここ？

気が付いたら、手を繋いだそのままの姿で少年と二人で明らかに空港ではない場所に立っていた。

？

2話 お仕事

『ユーリ、準備して』

浅いまどろみの中にいた私の意識がふっと浮上する。

目を開けると、寝ている間ずっと傍に付き添ってくれていた黒豹の優しい瞳に、寝ぼけ眼の私が映っているのが見えた。

「おはよう。アンリ」

寝癖を手で撫でつけながら欠伸を一つする私の頬を、闇の精霊である闇理はぺろりと大きな舌でひと舐めする。

時計を確認すると、ちょうど14時を過ぎたところ。

干し草にシーツを敷いただけのベットは、硬さも弾力も丁度いいし、何よりその香りが心地よい。

いくらでも寝られるため、昼寝のつもりでも熟睡して、つつい寝過してしまふ。

寝ぼけた体を目覚めさせるために、大きく伸びをしながら、私は外に出た。

「あー、夜かぁ・・・」

眠いなあ…とぼやく私の手を、後を付いてきたアンリがぺろりと舐める。

「闇の中で、実が熟すのを待つのもよからうて」

確かにいい考えかもしれないが、諸手を挙げて賛同するには、いささか眠すぎる。

水の精霊の水雅^{スイガ}に出してもらった冷たい水で顔を洗うと、完全には言えないが、多少気分がシャッキリした。

ついでに手渡された、葡萄のような黄色い果実が5、6個ついた房から、行儀悪くも一つ口に入れながら、樹全体が見える場所に移動する。

口の中に広がる果汁は、少し甘いレモンのような味で、全て食べ終わり、いつもの定位置に立つ頃には、寝ぼけた頭も大分すっきりしていた。

さてと、と呟き、周りに集まってきた精霊たちを見上げる。

「今回は、カオとフウ」

火の精霊である火生^{カオ}と風の精霊である風歌^{フウカ}に呼び掛けると、すぐに左手が温かいごつごつした大きな手に、右手が少し冷たいしなやかで大きな手に包まれる。

「じゃ、始めようか」

頷く二人の手をぎゅっと握り、目を瞑って大きく息を吸い込む。

これ以上吸いこめないというところまで吸い込んで、一度息を止め、そしてゆっくりと溜めた息を樹に向かって吹きこむように吐き出す。これ以上無理、というところまで吹き込むとゆっくりと目を開いた。

少し距離のある場所にたたずむ樹にはささやかな息など到底届くはずもないはず。

だが、その予測に反して、樹は息吹を受け、微かにその枝葉を震わせる。

初めは小さな震えであつたそれは、枝葉を伝わっていき、やがて樹全体を震わす大きな動きとなる。

枝葉の震えから生まれた風に、髪を弄ばれ、一瞬露わになった耳に、枝葉の擦れから生まれた火花が爆ぜる音が届く。

震える枝葉は、赤と白の蕾を抱き、ぱつと一斉に花を咲かせた後、大小多数の金色に光る実をたわわに実らせた。

たわわに実る果実から発せられる金色の光を纏い、樹は闇の中にその全体を淡く浮かび上がらせた。

何度見ても、幻想的な風景だ。

果実が実つたのを確認し、ほっと息をついた私は、酸欠で軽く眩暈を覚え、思わず繋いでいる手に縋ってしまう。

「大丈夫か？」

若干の不安の混ざった心配そうな眼差しを送る力才とフウカに、大丈夫という意味を込めて、にやりと笑って見せる。

「へーき。さて、仕上げといきましょうか」

そして、また大きく息を吸い込むと、今度は勢いよく息を吹き込ん

だ。

樹は新たな息吹を受け、大きくその身を震わせる。

その大きな揺れに、少しずつ枝葉から離れていく黄金の実は、光の色こそは違うが、蛍の飛び立つさまを連想させる。

枝葉から離れた果実は、まるで樹から離れがたいかのように、ふわふわと周辺を彷徨い、シャボン玉がはじける様に闇に溶けていった。

一日に数回、樹に息（少年は息吹というけど、私にはただの息だ）
を吹き込んでほしい。

それが、少年がこの世界で私に手伝ってほしいことだった。

因みに、わたしはその理由は知らない。

3話 少年の依頼

- 1 元の世界には帰れること。
- 2 元の世界とこちらの世界では、流れる時間が等しいこと。
- 3 樹に息吹を吹き込んで欲しいこと。

以上三点が、この世界に私を連れてきた少年が私に告げた内容だった。

…実際には、もっと謝罪と感謝の言葉を織りまぜた、長々としたものだったけどね。

空港に行く途中で買ったコンビニおにぎりを貪っていたわたしは、上記の要点以外はきれいに聞き流してた。

お腹すいてたしね。

会社を出てから今まで、何も食べてなかったしね。

もう、飛行機は飛び立つちゃったしね。

そう、こちらの世界（少年曰く、地球とは異なる世界らしい）でも、壊れることなくしつかりと作動する腕時計は、気付いた時には、既に出発時間が過ぎた時間を示していた。

やけ食いに近い感覚で、四個あるおにぎりを、瞬く間に食らっていかわたしに、少年がおずおずとチョコレートのお菓子を差し出してきたので、ありがたく胃に納めておいた。ごちそうさま。

「協力して、頂けないでしょうか」

縫るようにこちらを見つめる少年に、適当に返事を返す。

「おーけー」

決して、お腹一杯になって眠くなってきたから、面倒くさくなって適当に返事をしたというわけではない。

いや、だって、このまま元の世界に返さないという選択肢もあるんだよ、カイジユ少年には。

でもそのことを、表立っては出してこないということは、ある程度こちらの意思を尊重してくれているはず。

だったら、カイジユ少年が、下手に出ているうちにこちらに不利になりそうな交渉は済ませたほうがいい。

幸い、というか不幸にもというべきか、飛行機の出発時間はとつくの昔に過ぎてしまい、あらかじめ予定していた2週間という期間、わたしは時間が空いてしまった。

2週間後に元の場所に帰してくれるという話なら・・・この世界でのんびりするのでもいいかもしれない。

「二週間後に、必ず元の世界に送ってくれるのなら、その間ここで少年に協力するよ。」

海外旅行の予定を立てたのは、世界遺産を見たかったのはもちろん、

仕事に追われる日常から解放されたかったということもある。
それだったらこの世界で、非日常を楽しんでみよう。
こんなこと、なかなか経験できないしね。

そう前向きに捉え、後ろ向きなことを脳裏から締め出すことにした。

4話 光の精霊

「何を読んでるの？」

顔に乗せていたガイドブックを取り上げられて、浅い眠りから引き戻された。

樹に息吹を吹き込むまでの空いた時間に、太い樹の枝に蔭を絡ませて作ったハンモックに身を委ねて、ガイドブックを読みながら時間を潰していた筈なのだが、いつの間にか眠ってしまったらしい。

「旅行で行く予定だった国の旅行案内誌だよ」

興味深そうに頁を捲る光の精霊、光輝「コウキ」の持ってきた拳大の緑の果実を礼を言つて手に取り、小さく開けられた穴から中身を飲む。

ヤシの実のような外観のその果実は、ぼんやりと甘くかすかに桃のような芳香をもち、渴いた喉を潤していった。

「珍しいね」

この世界に来て1週間が経過していたが、コウキがわたしの前に姿を現すのはこれで3回目。

ここに来た時と、初めて息吹を吹き込んだ時、そして今。

そのことを指摘すると、本から視線を外して、いつもは闇「アンリ」の精霊がいるからね、と小さく苦笑された。

ほかの精霊とは一日に一度以上は顔を合わせ、お互いのことがある程度分かるようになっていたが、さほど馴染のないこの精霊は、あまり接点がなかったこともあって、よく分からない。

闇の精霊アンリは落ち着いた雰囲気を持ち、寡黙な性質。

火の精霊カオは口は悪いけど、一番の気遣屋。

対する水の精霊スイガは、物静かで癒し系。でも、自分の意見は通す頑固さを持つ。

大地の精霊チキは、どっしり構えていて、誰に対しても柔軟で怒ることはない。

風の精霊フウカは、いつも飄々としているように見せているけど、一番現実的。

でも、光の精霊コウキは、いつも微笑んでいて、優しげに見えるが・・・
なんとなく捉え所がないように感じる。

今日も珍しく声を掛けてきたけど、いったいどういう風の吹き回しなのだろう。

「今日は皆出払っているけど、不自由は無い？」

どうやら、いつも傍にいる精霊達がいないので様子を見に来てくれたらしい。

砕けた調子で話しかけてくるコウキに、少し肩の力を抜く。

「大丈夫。十分満足してるよ」

につこりと微笑むコウキに、ただちょっと暇になってきたかな、と軽く付け加えた。

初めのうちは2、3時間に一度の割合であつた息吹の吹き込みは、日を重ねることに間隔が長くなり、7日経った今では1日に1度あるかないかという具合だ。

おかげで睡眠時間は充分に取れているが、昼間は時間を少々持て余し気味になってきている。

いつもなら精霊たちが傍にいてくれるので気にならないが、皆が外出してしまうと途端に暇になってしまう。

^{コウキ}彼はこれを見越して、傍に来てくれたのだろうか。

少しクセのある蜂蜜色の髪に黄金の瞳、少年の純粹さと無邪気さを残した中性的な美しさを持つこの精霊は、人間離れた外観とは対照的に、人間っぽい気遣いを持つみたいだ。

「身近で樹を見てみない？」

^{コウキ}彼の分析をしていた私に、一通り最後まで目を通した本を渡しながらコウキはそう提案した。

「今でも充分近いところにいるけど？」

ハンモックの中でゆらゆらと揺れて曖昧に断りの返事を口にするわたしに、コウキは上からは見たことがないだろ、と手を差し伸べる。

それを聞いて、若干顔色が悪くなったわたしは、きっぱりとした断りの返事を返す間もなく、目に笑みを滲ませたコウキにふわりと抱き上げられて、そのまま勢い良く上空へ舞い上がった。

辺りには、楽しげなコウキの笑い声とわたしの絶叫だけが響いていた。

5話 高所恐怖症

「無理無理無理無理無理！！！」

わたしは少々、高所恐怖症の気があると自覚している。

マンションの2F程度なら、バルコニーから余裕で下を見ることができるが、3F以上になると足が竦んできて、階が上げれば上がるほど目眩がしてきてしまう。

・・・つまり、落ちてもまだ助かりそうな高さならば平気だが、確実にやばい高さになると駄目なのだ・・・落ちた時のことを想像してしまうから・・・

全力で拒否したのに、上空に連れて来られたわたしは、全身をいやな汗でびっしょりと濡らしながら、全力で光の精霊コウキの首筋にしがみついていた。

ここから見る景色は綺麗だよ。

わたしが恐怖に震えているのを解きほぐそうと、耳元で囁きかけてきたが、景色なぞ一瞬たりとも見る余裕はない。下を見ないように目を瞑って、怖い、降りしてと小声で訴えることしかできない。さつきちらりと見えた地面は、恐ろしく遠いところに見えた。大声で叫んだ拍子に、コウキの手が緩んで落ちたりしたら、ひとたまりもないだろう。

「降りしてほしいの？」

その言葉に、こくこくと何度も小刻みに頷く。何度も頭振ったので、一瞬気が遠くなりかけた。

「なら、なんでもお願い聞いてくれる？」

しばしの沈黙（わたしにとっては数時間にも思えたが・・・）の後、コウキは呟くように言った。

ここから降ろしてもらえるのならば、どんなことでも容易いことだ。早くお願いを言え、と言わんばかりに、再び小刻みに頷いた。

「何をしている？」

じゃあ、と言いかけたコウキの言葉が、耳慣れた低く響く声に遮られ、わたしは後ろに引つ張られた。

「ややややや・・・」

やめてと言いたいの言葉が出ず、引き剥がされまいと目の前にいるコウキの首に一層強くしがみつく。

「・・・っ」

息をのむ音がして、また強く引つ張られたが、わたしも離すまいとしがみつく。そのような攻防が数度続き、体力が尽きかけた私の一瞬の隙を突き、とうとう手が引き剥がされた。上半身が仰け反る形で後ろに引き倒され、思わず目を見開いた私の視界に、眉を寄せた闇の精霊アンリの姿が映ってきた。その理知的な（なぜか今は焦りと混乱を含んだ）黒い瞳と視線が合った途端に、これまで恐怖一色であった心が落ち着きを取り戻してきた。

「なぜ拒否する？」

いつもは穏やかで寡黙な精霊^{アンリ}が、悲しみを滲ませた声で私に問いかける。

・・・いや、おかしいよね？この状況。

高所にいるという恐怖はまだあるものの、大分落ち着いてきた私は、この状況を冷静に分析できるようになってきていた。わたしは今、落ちたら死んでしまうようなはるか上空で、下半身は光の精霊^{コウキ}、上半身は闇の精霊^{アンリ}に引っぱられるように不安定な状況で支えられている。

・・・なんで、私が加害者みたいになっているんだろう。なんで、闇の精霊^{アンリ}は被害者のような顔をしているんだろう。不思議だ。

「怖いから」

多少冷静になって、声が出せるようになったようだ。じっと見つめる精霊^{アンリ}に答えを返すと、彼は青くなり、わたしを支えていた手をパツと離れた。

「うつきや

！……」

当たり前だが、上半身の支えを失った私は、精霊^{コウキ}に下半身を持たれて逆さ吊りになった。

その私に視線を合わせて、闇の精霊^{アンリ}がなおも問いかけてくる。逆さ吊りになった恐怖で、パニックになった私の思考は、闇色の瞳により再び落ち着きを取り戻す。

「何が怖いのだ？直すから教えてくれ。それとも私が留守にしたか

「ら怒っているのか？」

矢継ぎ早に質問してくる闇の精霊^{アンリ}に答えようにも、頭に血が昇って苦しくて答えられない。

このまま死ぬのかも・・・と覚悟を決めたとき、大きな体に抱き上げられた。

「ユーリは飛べないから、高いところが怖いんだろ？」

ほっとして火の精霊^{カオ}の言葉に大きく頷く。

逆さ吊りになって血が昇ったせいで、耳がジンジンして顔が熱い。そんな私の頬にひんやりした手を当てて、ほっとした表情を浮かべる闇の精霊^{アンリ}。

「それならばそうと言ってくれ」

・・・おかしいよね？私は被害者で間違いないよね？

6話 小さな親切、大きな・・・

高所恐怖症にはかなり辛い荒行を終えて、ひとまず、樹の頂上近くの枝——といっても直径2メートルはありそうな枝だけ——に降りてもらった。

自分で枝の上に立った瞬間、全身の力が入らず脱力して膝をついた私に、闇の精霊アンリが抱いて行こうかと提案してきたが、丁重にお断りした。

今までいたところと高さ的には変わらないが、何も頼ることのできない空中よりも、枝とはいえ自分の足でしっかり立つことのできる今の状況のほうが遥かに安心できるというものだ。

遠くから見ると、楠のような外観を持つ樹は、近くで見ると白樺のような樹皮を持っているので、少しでも油断すると、滑り落ちてしまう危険性がある。

危険予知って大事だよな。

濡れて滑りやすくなっているところや足元が見えないところ、風が強く吹いているところがないか等を充分に確認して、そろそろと注意深く腰を上げたわたしに、精霊たちが集まって来た。

どうやら、光の精霊コウキに抱えられて空を舞い上がった時に上げた悲鳴を心配して、みんな外出先から戻ってきてくれたらしい。久しぶりの全員集合だ。

しかし、いくら太い枝の上とはいえ何人も固まって歩くことはできないため、一人で慎重に枝の上を歩こうとしたわたしに、水の精霊スイガが話しかけてきた。

「私が、手を繋いでいましょうか？」

手を差し出してきた水の精霊スイガの足元を中心に、水が滾々と湧き出しているのが目に入り、嫌がらせだろうかと疑った。

「・・・水で足元が滑るので、お断りします」

そう断ると、哀しそうに目を伏せたので、嫌がらせではなかったようだ。疑って申し訳ない。

「じゃあ、俺と一緒にいてやろうか？」

風の精霊フウカがこちらとの距離を詰めるのに比例して、体を感じる風が強くなり、思わず膝をついてしまう。

「・・・風に煽られるので、やめておきます」

というか、それ以上近くに来られると、吹き飛ばされて落ちそうだ。

「私と行くだろう？」

「手を繋いであげようか」

闇の精霊アンリと光の精霊コウキが近づいてくるのを、手で制する。

「・・・明るすぎても暗すぎても足元が見えにくくなるので、結構です」

みんな、親切心で言ってくれているんだろうけど、危険因子はない

ほうがいいに決まっているので、はつきりきっぱりお断りさせていただきます。

少しばかり自分の口調がきついものになっているのは自覚しているが、状況が状況なので、とりあえず身の安全を先に確保するのを優先させてもらおう。

ちなみに、火の精霊^{カオ}もこちらに声を掛けようか悩んでいるような素振りを見せていたが、彼のまわりの枝葉がパチパチと音を立てて燃えているのを見て、気づかないふりをさせていたのだ。

火に巻き込まれるという新しい危険因子はいらないです。

結局、大地の精霊^{チキ}に足元を土で固めて安定な道を作ってもらいつつ先導をお願いして、樹の枝を渡っていくことにした。

目指す先はもちろん、遙か下にある地面だ。

みんなに頼めば、すぐに抱きあげて樹から下に降ろしてくれるだろうが、この場所にたどり着くまでの恐怖は払拭^{ハツシ}がたいし、精霊たちの行動や思考はこちらの斜め上にあるときがある。

どんなに時間がかかろうと、地道に一步步降りるのが、精神的に一番安心できるというものだ。

そう決心して歩き始めたわたしの後ろを、ほかの精霊たちは付かず離れずの距離で歩いて付いてきた。

土で固めた道^{スイガ}が、水の精霊の足元では、湧き出す水で溶けて形を崩し、風の精霊^{フウカ}の周りでは身に纏う風により吹き飛んでいくのを見て、あちらには近寄らないようにしようと改めて心に刻んだ。

・・・・っていうか、飛べるんだし嫌がらせのつもりじゃないんなら、
できるだけ離れていてほしい。

7話 果実

地面に向かって歩き始めてから10分もすると、高いところにいるという恐怖感も徐々に薄れてきて（地面を見下ろすと、じんわりとした恐怖は感じるけれど）、初めてのころよりもだいぶん余裕を持って辺りのことを観察することができるようになってきた。

それにしても不思議な樹だ。

白樺のようななめらかな樹皮を持つ枝に付いている葉は、間近で見ると透明で、それ自体はエメラルドグリーンの光を放っている。まるでガラス細工のようっていて、触れるとひんやりとしてしなやかな質感を持つその葉は、よく見ると光の精霊コウキに近いところにあるものは金色、闇の精霊アンリの傍では黒、火の精霊カオの傍では赤色にと精霊の持つ色に合わせて、その発光する光を変化させているようだった。くるくると色の変わるその様はずっと見ていても見飽きない。もちろん、地の精霊チキの周りでもその光は変化して、わたし達の周りの葉っぱは甘いチョコレートのような落ち着いた茶色へとその姿を変えている。

そんな状態だったから、余計に目立っていたのかもしれない。目の前で変化する枝葉の間に見え隠れする大きな果実が目に入ってきた。

その大きさは一抱えはありそうな特大の西瓜のサイズ。

形は真ん丸で金色に発光しているその姿は、十五夜に見るお月様のようなでいて、風に揺られてふよふよと動くため、大きな風船を連想させて愛らしい。

「どうした？」

思わず立ち止まり見とれてしまったわたしに、闇の精霊アンリが近づいてきたため、辺りはうつすらと闇に包まれ、果実はその存在を一層際立たせた。思わず手を伸ばして触つてみると、ふにふにと柔らかくほのかな暖かさを伝えてくる。

「この果実、なんで残っているんだろ」

「これは、双子なんだよ。ほら、片方は枯れているのに離れがたくてここにいるんだよ」

いつの間にか隣に立っていた光の精霊コウキが身に纏う光を強くし、闇を振り払って一面に淡い光が広がると、黄金に光る果実の輪郭は淡くなり、闇に紛れていたもう一つのくすんだ果実が姿を表した。

大きさはラグビーボールぐらいで、干したプルーンのように皺が寄って縮んだような形状をしているその果実は、確かに枯れているように見える。

「このまま残っていると、こっちの果実もじきに腐って枯れるだろうね」

感情もこもらず淡々とそう断言する光の精霊コウキに、ふーんと興味なさげに返し、枯れた果実を手を取った。黄金の果実とは対照的に、ひんやりとして凹凸した表面をしていたが思っていたよりもその手触りは柔らかい。ふにふにと揉むと何となく不条理な一部の精霊たちの行動で、ささくれ立っていた心が癒されるような気がする。

しばらくふにふにと揉み続けていたわたしは不意に、その果実に口を付けた。

「食べる気か？」

闇の精霊が珍しく驚きをにじませた声で質問を投げかけてくるのに、果実から口を離さず首を振って否定する。

確かにこちらの世界に来てからは、寝てるか食べてるかしていることが多いが、手当たり次第になんでも口にするとされているのだろうか。

ほかの精霊たちから感じる視線も似たようなもので、みんなからどんなふうに使われているか少し見えた気がする。巨大ブルーに癒されたはずの心が再びささくれ立つ気分だ。

少しばかりやさぐれた思いをしながら彼らをジトツ半眼でと睨み付け、萎んだ風船を膨らませるようにゆっくりゆっくりと息を吹き込み始めると、わたしのやろうとしていることが分かったのか、ようやく合点がいったとばかりの表情になっていった。

「無駄だよ。枯れたものは元に戻らない」

光の精霊コウキがそう呟くのを無視してどんどん息を吹き込んでいくと、息吹を吹き込まれた枯れた果実は、イメージ通りにまるで風船が膨らむようにその実を徐々に膨らませていく。

ラグビーボール大のブルーが西瓜のように丸い形に姿を変え、寄り添うようにしていた黄金の果実と同じくらいの大きさになり、ひんやりとした表面がかすかに暖かくなってきたのを確認して、ようやくわたしは口を離した。

風船のように膨らんだものの、口を離しても果実は萎むそぶりを見せず丸い形を保ち続けるその果実は、くすみを払拭し、隣の黄金に輝くそれとは異なった淡い白金の輝きを放ち始めた。

無理だと言われたことを覆すことができたわたしは、どうよと言わんばかりに誇らしげに顔を上げたが、驚愕の中に混じる喜色や不安、思案といった様々な表情を見せて沈黙する彼らを見てそのままついと手元に視線を戻してしまった。なにか微妙に気まずい。せめて何か言葉を発してほしい。

「あれ？」

視線を外したのは、ほんの一瞬だけ。しかしその一瞬で、先ほどまであった果実は影も形も無くなっていた。先の手元をじつと見て、辺りをぐるりと見回してもそれらは見つけることができず、狐に抓まれた心地になる。

微かに温かさの残る掌をわきわきと握ったり開いたりしてみるが、温もりは掌に帰ってこず、本当に現実のことだったのだろうかと自信が無くなってきた。

「・・・そういえば」

どのくらい沈黙が続いただろう。その間、ずっと手をわきわきさせていたわたしに、唐突に光の精霊コウキが満面の笑みで微笑みかけてきた。その何処と無く嘘臭い笑みに微かに警戒してしまい、へらつと愛想笑いして思わず一步あとずさるが、彼はさらにこちらに一步踏み出して耳元で言葉を続けた。

「旅行案内書に載っていた場所に似ている国があるんだけど、行ってみる？」

8話 お勉強

「この世界は、この世界樹を中心に成り立っている。ここ、天界には私たちしか居ないが、この下にはほかの種族のものが多数住んで生活している。」

早まったかもしれない。

光の精霊に言われた言葉に興味を持ち、即座に頷いたことを私はいま猛烈に後悔していた。

ほうほうの体で地上に降りたわたしに待ち受けていたのは、安堵感に浸ることも許されずに始められた講義へんぎょうだった。

ちなみに、地上に降りてきた手段は思い出したくもない。

…もう、滑り台がトラウマになりそうな手段だった。地の精霊は常識人（人じゃないけど）って思った自分が馬鹿だった。

そんなこんなで魂が半分遊離した状態のわたしに行われた講義はほとんど耳に素通りしていった気がする。

それでも、頭に残ったことをまとめると、おおよそ以下の通りだった。

まず、この世界には大まかに分かれて、空・水・地の3つの場所に5つの種族が住んでいる。

空には竜族と翼人族が国を作り、海や湖などの水には人魚族、大地には人間族と獣人族が住んでいる。

竜族はその力と魔力がほかの種族よりも優れるが、個体数は一番少ない。翼人族は風に加護が強く、人魚族は水に加護を強く受けており、これらの分野にかけては他の追隨を許さない。

一方、大地に住まう人間族は、全体的に魔力は平均的にそこまで高

くはない。獣人族に至っては魔力が更に低い。しかし、獣人族は身体能力に優れているし、人間族は繁殖力が強いいため、それぞれの種族の力は拮抗しているらしい。

そのほかも、なんかいろいろ教えてくれたけど、教師陣には申し訳ないけど正直あんまり覚えてないです。精霊たち

あまりに元の世界と違うので、月並みながらもファンタジーだなあ……という感想を抱いたことだけは覚えてるけど。

講義の締めくくりは、オリムピックの誘致ばりの精霊たちのアピールだった。

「私のお勧めは、人魚族です。水の中に住まう彼らは、独特の進化を遂げており、その姿は優美で美しい。」

うつとりと思い出すように遠くを見ながら語るのは水の精霊。こんな美人さん（精霊だけど）に優美で美しいと言わせる人魚は確かに見てみたいが、いかんせん私は水の中では生きられないから遠くから鑑賞するだけにさせてもらいたい。

「翼人族もお勧めだよ。ユーリの世界は人間しか住んでいなかったんだろ？大空を高々と舞うその姿は、凛々しいものだよ。」

いまだに夢見るような眼差しの水の精霊に被せる様にして言葉を発したのは風の精霊だ。

「それなら、竜族だつて見たことがないよね。特別にその背に乗せてもらつて、空を飛んでみたらどうかかな？」

爽やかに遮った光の精霊は、風の精霊の言葉に眉を寄せた私を見て面白がっているように続けた。
うん、あれだけ騒いだんだもの。分かっているよね。高所が苦手な私とその種族の住んでいるところを好き好んで訪れることはないってことを。

「空は飛べないが、獣人族も見たことがないでしょう。それとも、同じ人間族に会ってみたい？」

大地の精霊がそう薦める後ろでは、火の精霊が腕組をしながらうんうんと頷いているのが見えた。
せっかく違う世界に来ているんだから、やっぱり興味があるのは獣人かなあ…

そんな中、闇の精霊だけはそれらのアピールには参加せずに、ただじっとこちらを見つめていた。

「ずっとここにいればいい」

最後にぼつりと呟いた彼の言葉が、なぜだろう最期まで耳に残っていた。

9話 出発準備

「はい。これあげる」

ほとんど聞き逃した講義と無駄に長いアピールタイムの後に風の精霊が手のひらに載せて差し出したのは、透き通った薄い緑色をした親指の先くらいの大きさの玉を二つと色とりどりの糸を編み込んだ布だった。

「なにこれ？」

色の薄いエメラルドのような見かけの玉を指先で摘みあげると、寶石のような硬質な外観を裏切って、微かに冷たく柔らかい。ぷよぷよしたその触り心地は、まるでわらび餅のようだ。

その感触から自然と食べ物を連想してしまい、お腹が鳴ってしまっただのは考えてみれば当然のことだったと思う。

突然樹の上に連れて行かれた挙句に、休みもなく長時間の講義が行われたのだ。

先ほどまでは地面さえ遠く感じるほど高い場所にいた恐怖により麻痺していたが、地上に戻ってこられた安堵により私のお腹は空腹感を訴えている。

お昼の時間はとくに過ぎたことを、私の体が正直に教えてくれているにすぎない。

思わず赤くなり、気まずさを紛らわすように心の中でそう言い訳する私の手から、風の精霊は二つの玉を持ち上げた。

…というよりも、口に入れる前に取り上げたというほうが正しいような素早い動きだった。

「食べ物じゃないよ」

そう言つて二つの玉を左右の手に一つずつ握り、これが終わつたら食べ物を持つてきてあげるから、とにっこり笑つて私の両耳を塞ぐように手で覆つた。

玉を握つた風の精霊の手が触れた瞬間、水の中に潜つた時に聞こえるザーという音が聞こえた後、その二つの玉は、ぴったりと耳の中に納まつた。不思議なことに触つてみると確かにそこにあるのに、何かを入れているという圧迫感はなく感じない。

「お手製の風珠。どう？ちゃんと云つてること分かる？」

いつもと変わらなく聞こえた問いかけに、何を確認されているのか不明なまま首を縦に振ると、風の精霊は上出来だと言わんばかりの顔で私の耳の中に在る不思議な珠の説明をしてくれた。

なんと、この風珠の中には風の精霊の力が込められていて、外から聞こえる言葉の振動を自動的に日本語に翻訳した音の振動に変換して私に伝えてくれるらしい。

一体何の冗談だと思つたが、しばらく会話を続けてみれば、確かに口の動きと耳に聞こえる音が異なっているのがわかつた。風珠を耳から外して喋つてもらつと、まったく聞いたことがなく欠片も理解することもできない言葉の響きが耳に届く。

「言葉が異なるんだ…」

そういえば異世界だつた。と今更ながらに実感する。

確かに国が異なるだけで言語が異なるのに、世界が異なるこの場所が同じ言語、それも日本語が通じるわけがない。常識的に考えれば、今まで言葉に不自由していない状況が異常だつたといえる。

そのことに気づき、じゃあ何で今まで言葉が通じていたんだろうと首をかしげた私に、火の精霊がユーリの言葉を世界樹つまり少年から学んだんだ、と教えてくれた。

まるで、日本で育ったかのように流暢に言葉を操る彼らに感心する私に、このくらい簡単だと風の精霊が無駄にさわやかに笑う。

聞けば、日本語以外にも地球上の言語は習得しているとのこと。

英語だけでも習得するのに時間がかかったこちらとしては、何ともうらやましい話だ。

それにしても、カイジュはどこで言葉を学んだのかは謎だ。自宅留学のようなシステムでもあるのだろうか…

「こっちは何？」

手に乗っているもう一つのは、ごわごわした外観と異なりしつとりとした絹のような手触りで、丸い筒状の布だった。

例えるなら…そう、ヘアターバン。メイクのときに使用するあれにそっくりだ。

もしかすると、こっちに來てからは昼夜問わない息の吹き込み作業のために不規則な生活が続いたので、お肌のためにも化粧はしなかったけど、よそに行くならちゃんとしろよという指摘なのかもしれない。

面倒くさいな、と20代後半としては軽く女を捨てているようなことを考えていたら水の精霊がそれを私の頭にかぶせてきた。

「これも翻訳のために使用するんです。これを通せば、風珠とは逆にユーリの言葉をこちらの言語に変換できるんですよ。」

おしゃれなネックウォーマーのように身に付けたそれを、口元を覆うように伸ばして二言三言喋りかければ、ちゃんと通じていると風の精霊が満足そうに頷いた。これも、耳にはめた風珠同様に発した言葉の振動をこちらの世界の言葉の振動に変換してくれているらしい。風珠を装着した自分の耳には全く通常と変わらないものしか聞こえないから、正直言って実感がわかなかった。

ちなみにこの翻訳ネックウォーマー、他の精霊たちの力も込められているらしく、温湿度コントロールができたり、発光したり、アイマスクとして使用すると安眠できるという無駄機能も付与されているらしい。

さて、只今私は一人で荷造りの真っ最中。
そう、一人で。

翻訳機が正常に作動することを確認して、共通語をいくつか教えてもらった後、どの世界に行きたいかと問われたので、獣人族のところに行きたいと率直な気持ちで答えたのに、風の精霊と水の精霊が

現地に住んでいる者から話を聞いた上で回答すべきだと言い出したので、精霊^{みんな}たちは推薦する種族の代表者を連れてくるためにそれぞれ出払ってしまった。

昨日の今日で決まったことに付き合わされる代表者の方には同情するし、申し訳ない気持ちでいっぱいだ。必要ないと訴えたのに、その言葉を素通りさせてさわやかに去って行った彼らが羨ましい。きつとストレスなんてないんだろうなあ…

一休みついでに精霊たちが差し入れてくれた果実を口に入れながら、先ほどまではなかった樹にぽっかりと空いた穴に視線を向ける。

ここから水の精霊は人魚族、風の精霊は翼人族、光の精霊は竜人族、地の精霊は人間族、火の精霊は獣人族を迎えにそれぞれの住む場所に向かつていった。

ちなみに、闇の精霊は少年^{カイジュ}に呼ばれて席を外しているために不在だ。

精霊^{彼ら}だけならば界を移動するのにこの入り口^{入り口}は必要ないらしいのだが、異なる界に住む代表者が行き来するには道が必要らしい。そのために、先ほど急遽私が生活していた洞の隣に、同じくらいの大きさの穴を開けて出入口を作っていた。

こつちの世界に来て一人になるのは初めてだったので、ちょっとさみしい気分がするが、皮肉なことにその分荷物のパッキングは捗っている。

「化粧品入れた、下着と靴下に服は4日分。コンタクトに眼鏡OK。ああ、薬と保存食も一応入れておこつと」

スポーツバックにスーツケースから出したものを、口に出して確認

しながらポイポイと放り入れていく。

2週間の旅行の予定のうち、既に半分経っているから、今日を含めて残りは1週間。

移動には半日かかるというから、実質自由になる時間はほぼ5日。

最後の日はここでみんなとゆっくりしたいから、観光に費やすのは長くても4日と決めていた。

皆と話し合った結果、限られた日程を有効に活用しようと、代表者が揃ったらずぐ旅立つことにしたため、今大急ぎで荷造りを行っているのだ。

「翻訳機は身に付けているし、現金と鉱石もある」

現金はこちらの通貨を持つてはいないので、地の精霊がお小遣いとして渡してくれた共通通貨と市場価値の高い鉱石というか宝石？数点を、有難く頂戴した。1週間ほど飲み食いできる金額らしいので、街に出て買い食いするのが今から楽しみだ。

ここに来てから毎日、見たこともない果実や木の実を精霊たちが持つてきてくれていた。それはこれまでに食べたことのある味に近いものもあれば、外観からは全く予想もつかなかった味のものまで多種多様なものであった。しかし、贅沢な悩みとは分かってはいるがたまには調理した料理が食べたくなる。そういう点では、人間族のところに行くのもありかもしれない。

手慣れたもので、見知らぬ食べ物を色々と想像しながらも荷造りは着々と進んでいった。

あとはベッドに置きっぱなしの櫛を入れたら完了だ。

少々重くなったスポーツバックを抱えて、持ち歩ける重さか確認しながら、この1週間お世話になった洞のほうへ行くために立ち上が

った。

後で後悔しても遅いとは分かっているけども、今思えばクシくらい無くてよかったんじゃないかと思う。

洞の中に入った瞬間、あると思っていた地面の感触がないことに気が付いた。

戻らなきゃと思って、慌てて来た方向を振り返ったが、そこあった筈の扉はいつの間にか掻き消えていた。

背中に冷たい汗が伝って流れるのをやけに生々しく感じられた。

1話 迷子

入ってきた扉が、目の前から掻き消えてしまった。

その事実慌てて、慌てて扉があった筈のところに駆け戻ろうとした。しかし、踏み出そうとした一歩はぐにやりとした足元に攫われて、それは叶わない。

前に進むことも後ろに下がることもできない状態に、一気に血の気が引く。

やってしまった。

そう、私は生活していた洞と先ほど精霊たちが通り道として開けた洞を間違えて入ってしまったのだ。

迷い込んだここは上下左右も空間の広ささえも分からない場所だった。

光も目印となるものも何もなく、かといって闇が広がっているわけでもない、自分の身体は認識できるが、まるで夢の中にいるようにともすれば自分の存在があやふやになるような空間だった。

「おお…落ち着け、自分。大丈夫大丈夫」

半ばパニックに陥った思考を鎮めるために、強く両手で頬を叩き気合を入れる。力の加減がうまくいかず、パンと叩いた音は思ったより大きく聞こえた。

でも…うん、大丈夫。夢と違ってちゃんと痛みを感じる。精霊たちはこの道というより空間を通して行ったのだから、入ってすぐのこ

の場所で待っていれば帰りに拾ってくれるはず。そう自分に言い聞かせて、ジンジンと痛む頬を擦った。

しばらく迷子の法則に則って、迷った場所から動かずに突っ立っていたが、初めのパニック状態から抜け出すとだんだん暇を持て余すようになってきた。

始めのうちは、迷子らしく誰かいないか大声を出して助けを求めたり、なぜ入る洞を間違えたのかと自分自身を叱責してみたのだが、まったく反応が返ってこないし、なんだか虚しくなってきた。

もともと楽観主義者でなるようにしかならないと人生を歩んで来た私は、良くも悪くも緊張感が長続きしない。

働け私の第6感などと思いながら、今いるこの場所から抜け出す方法がないか目を皿のようにして観察してみたが、そんな便利に働くようなものでもないらしく動くものはおろか動かないものすら何も見つからない。

更にタイミング悪いことに腕時計が壊れて動かなくなってしまったので、この場所でのくらの時間が経過したのかも分からない。

ずしりと右肩に負担を掛けているスポーツバックから水の入ったペットボトルを取り出すと、上着を脱ぎながら重い荷物を左肩に持ち

替えて肩をぐりぐりとまわす。

「そろそろ動こうかなあ…」

そつと足を一步踏み出すと、床とは違う弾力ある感触が足の裏を押し返す。先ほど慌てて踏み出したときにはこの感触に足を掬われたが、ゆっくりであれば歩けなくもない。

それだったら、ちよつと動いて今いる場所を調べて見よう。

何もないこの空間は、もちろん目印になるようなものも存在しないので、下手に移動すると元の場所が分からなくなる危険がある。手に持ったペットボトルから水を一口飲んで、目印代わりになるように脱いだ上着をその場に置くとゆっくりと弾む床を移動した。

足元の感触はまるでトランポリンのようで、面白いくらいに弾む。

始めこそ恐る恐る移動していたが、慣れとは怖いものでしばらく経つとばよんばよんと跳ねながら移動を始めていた。しばらく移動したものの、空間の果てには辿り着かないし、面白くないほど周りの風景もまったく変化がない。

しょうがない。一度もとの場所に戻るか。

…ミツケタ…

来た方向に戻ろうと振り返った私の耳に、小さく囁く様な声が聞こえた気がした。

「…だれ？」

誰かいることを望んではいたが、実際何か聞こえとめちやめちやびつくりする。思わずびくつと体全体で反応してしまった。

跳ねるように忙しく動く自分の心臓の音を感じながら恐る恐る周りを見渡したが、先ほどからと変わらない何もない空間しか見えない。

「誰かいますか？」

幻聴かなと思いつつも、もしかしたら自分と同じように道に迷った人かもしれないと、先ほどよりも大きな声を出して問いかけてみた。

…コッチ…

今度ははつきりと声が聞こえた。それとともに、左肩に掛けたスポーツバックの紐がずしりと重くなった。

しかし私は気のせい気のせい、と自分自身に言い聞かせてしまう。だって、はつきり言っただけ。言葉が返ってくるなら精霊たちのものだと思っただけに、か細い声が聞こえて尚且つ荷物が重くなるこの状況は、それなんてホラーの一場面？と問いただしいくらいだ。

冷たく震える自分の手でその紐をしっかりと握り締めながら、重くなったスポーツバックの方に視線を動かす、そのままそつと視線を元に戻す。スポーツバックに目印の為に付けておいたカエルのストラップが半透明の小さな白い手に握られていたのは、私の目の錯覚だ。

その手の類は話を聞いただけで眠れなくなるくらい苦手な私としては、この状況はあまり…いや、かなり好ましくない気がする。いや、気がするんじゃないかと本当に好ましくない。

肘から先しか見えないその白い手になるだけ見ないように視線を外しながら、さりげなく荷物を守るように引き寄せると、その小さな手はあっさりとストラップから手を離して荷物を直接引張ってくる。その小さな手を荷物から引き剥がしたいのだが、どうしてもそれに触れる勇気が湧かずに手に持ったペットボトルでつついてみた。

…状況は何も変わらなかった。むしろ、悪くなった…

啞然として、二本に増えた手を見つめて、泣きたくなってきた。

「ちよつ、やめてよ」

段々と激しくなる小さな手（二本）との攻防に、とうとう半泣きになりながら全力で荷物を引き寄せたが、小さな子供のような手のひらの大きさに関わらず相手の力は強く、全身の体重を掛けて抵抗しても荷物を奪い返すことができない。いや、相手は時々緩めたりいきなり強く引張ったりするような動きを見せるために、まだ余力があるかもしれない。

現在いる空間に地面がないため綱引きのように足で踏ん張ることもできず、いつしかスポーツバックを死守するために体ごとしがみ付く形になってしまっていた。

何しろこのスポーツバックの中には、今現在私が所持している財産のほとんどすべてが入っている。もちろんその中には携帯保存食も入っており、いつまでこの空間に居なければならぬのか予想もつかない私にとって、正に生命線ともいえる非常に大切なものだ。

とにかく必死だったが、その中でも吊り上げられる魚はこんな感覚なのかな、と一瞬思ってしまったのは緊張感が長続きしない私の悪

い癖に由来するものだろう。

この一瞬の思考の隙を突くかのように、その二つの手は掴んでいた手をいきなり離れた。

「ちよっ…ずるっ!!」

全身の力を込めた引つ張り合いの最中にその手を外され、思い切りバランスを崩した私が、その手の行動にとっさに不平を口にしてしまったのは仕方のないことだったと思う。もっとも、それが相手に届いたかは不明だが…

…ココニイタ…

ろくに防御も取れずに無様に体制を崩した私の顔に、二本の手が近づいてくる。そのホラーな状況に、思わず目を瞑ってしまった。この一瞬の間にどのようなことが起こったのかは何もわからない。

ただ、頬に触れてきた予想外に温かい掌の感触に、ほんの少し恐怖が薄らいだ。

2話 脱出

目を開くと、私はだだっ広い何もない空間ではなく広い建物の中にいた。

「は？」

状況を把握できずに、思わず間抜けな言葉を発してしまう。

今いる場所は、おそらく半球状の建物の中。広さといい屋根の高さといいてまるで開閉式のドームのようなこの建物は、天井付近が大きく開いており、そこから覗く大きな太陽からは柔らかな光が降り注ぎ、白い建物内をほのかに赤く染め上げている。

「は？」

状況が理解できず、もう一度間抜けな言葉を発する。

静寂の満ちる建物の中心部にいる自分の目の前にあるのは、白と黒の色彩を纏った卵形の二つの石。降り注ぐ光を浴びるその姿は、まるで日向の縁側で寄り添うお年寄り夫婦のような風情を醸し出している。

先ほどまで私に触れていた小さな二本の手は、いつの間にかいなくなっている。状況が飲み込めないまま、スポーツバックに両手両足を絡ませた間抜けな格好でしばらく床にへたり込んでいた私は、中に入っている化粧品ポーチがゴツゴツとして地味に痛いのに気が付き、強く抱きしめていた荷物から手足を離れた。

「出られた…？」

先ほどまでと違い、自分の発した声は広々とした空間で思ったよりも大きな音で響いていった。

…てか、どこよここ？…

恐らくこの場所は、自分の住んでいた世界が精霊たちと過ごした世界、もしくは精霊たちが代表者を迎えに行った世界のどれかだろう。まったく絞りきれしていない推測をして、先ほどまでの弾力のある足元と異なる冷たく硬い石の床をしっかりと踏みしめて立ち上がった。

真上に昇った大きな太陽から降り注ぐ光は先ほどよりも薄くなっており、徐々に闇の比率が増している。その様子を見て、ここが元の世界（地球）ではないことが分かる。

この世界の太陽は常に天頂にあり、沈むことはない。かといって常に日が照っている訳ではなく、朝淡く輝き始めて昼にその黄金の光は最大となり徐々に夜に向かってその光は淡くなって消えていく。どという原理化は不明だがこの世界では太陽の位置は変わらずに光量のみが変化する。現在、太陽が天頂にありながらも徐々にその光が薄くなっているこの状況は、今いる場所が地球ではないことを端的に示唆していた。

これまで精霊たちとすごしていたところには、人工的な建築物はなかったから、消去法で考えるとこの場所は精霊たちが代表者を迎えに行った世界なのだろう。

とりあえず、人魚族のところに出なかつただけ幸運だったことに安堵する。

いくらなんでも、泳げないわけではないが、水中に出て無事でいられる自信はない。

ここがどこか分らないけど、誰かに聞いたら分かるよね。と樂觀視してネックウォーマーを口元まで引き上げると目の前の二つの石に近づいた。

その二つの卵型の石は、意匠の凝った細かい模様が細部に装飾された台座の上に鎮座していた。一つは黒の、もう一つは白の色彩を纏ったそれらの石は、表面がつるりとした光沢があり、大理石でできているようだった。

「何かの美術展を開催中とか？」

それにしても、警備の人がいないし、台座に固定されてもいない不安定極まりない状態だ。落ちたらどうするんだろうと余計な心配をしながら、石に顔を近づけるとその黒い表面に自分の姿が映りこんだ。

…寝癖が付いていた…

手櫛で跳ねた部分を均して他におかしいところがないか、さらに顔を近づけて確認した。が、鼻から下が覆われていてよく分からない。ネックウォーマーを再び首元まで引き下ろそうと体を動かしたその時、卵形の石に手の甲が触れた。

絶妙なバランスで卵型の石は立っていたのだろう。微かにしか触れていないにも拘らず、ぐらり、と卵形の石が傾いだ。

「うわっ!!」

慌てて、両手で抱え込むように抱き止められたのは幸運だった。一瞬にして跳ね上がった心臓の音は痛いくらいだが、落とさなかったことにほっと深く安堵のため息を吐いた。

胸の中に抱いた卵形の石はその見かけに反して暖かく、冷えた体を徐々に温めてくれる。

暖かいな、と思わず頬ずりしてしまった後、何か違和感を抱いて慌ててその頬を離れた。

…何か違和感が…

まじまじと卵の表面を見つめて漠然とそう思った。

…何か違う…

隣にある白い卵型の石を見てそう感じた。

…確実に違う…

隣にある白い卵型の石をと比較して判明した。

抱えた石は触れている部分から、卵の色というか状態が変化している。

…これって、私が触ったからだよね？…

青ざめる顔色とは裏腹に、卵形の石は大理石ではなく天然石でできているかのような黒く透明なものへと変化し続ける。手を離せばもしかしたら元に戻るかもしれないと考えたものの、あまりの不思議現象に呆然としてしまい実行には移せない。

そんな間にも石はどんどん透明となり、その中に内包したものを徐々に浮かび上がらせていった。

3話 卵

ぷくりと丸く膨らんだおなかを抱えるように丸くなる小さな体。
紅葉の葉のような小さな短い手に付いているのは、三角に尖った小さな爪。

外界の音を聞くようにぴくぴくと動く小さな耳。
その背には、ふるふると揺らめく小さな翼が見える。

「爬虫類……？」

つぶやく言葉が聞こえたのか、ぷくりと体を震わせてゆっくりと開かれたその小さな瞳の中では、銀色の縦長の瞳孔が眩しそうに揺らめいた。

黒く透明な結晶の中に内包されていたのは、人間の赤ちゃんくらいの大きさの爬虫類だった。爬虫類は苦手ではない。しかし、種類は不明だが、卵の段階でこのくらい大きいとなると親はどのくらいの大きさなのだろう？ そう考えて冷や汗が流れた。

先ほどまでは美術品に勝手に触れたことを咎められる可能性だけを考えていたが、この状況はその予想を超えてさらに悪いものである可能性がある。

昔見たハリウッド映画の一場面が脳裏に過ぎる。過去に絶滅した恐竜を蘇らせて一大テーマパークを作る話だ。その中で恐竜の卵（含子供）を手にしようとした人間の末路が、自分の今置かれた状況に被ってみえた。

「まさか、ここって巨大爬虫類の巣？」

慌てて周りを見回すと、今いるこの建物が巨大爬虫類を飼育する巢に見えてきた。

遠くに見える大きな扉は巨大爬虫類の親の出入り口で、その横にある小さな扉は飼育係の出入り口に達しない。そう思い当たり、即座に親が帰ってくる前に逃げることを選択した。

腕に抱えた卵に視線を向けると、中の爬虫類がこちらを見て大きく口を開いた。既に私よりも大きいその口からちろりと覗くのは、小さな舌と鋭い牙。

…えさ認定された？…

慌てて台座の上に乗せようとすると、中にいる爬虫類が拒否するかのように激しく手を動かしてその影響で卵がぐらぐらと揺れる。激しく動く卵は、手を離れたら支えを失い台座から落ちてしまいそうで手を離せない。

「ちよつと落ち着いて」

まったく落ち着きのない私が言っても何の説得力はなかったのだろう。卵の中の爬虫類はさらに激しく手を動かす。その小さくも鋭い爪に外殻が触れ、かりりという小さい音とそれに連動した小さな振動が卵を抱く腕に伝わってきた。

そんな時だった。

「何をしている」

後ろから聞こえてきた凜と響く声に、あまりにも驚きすぎて全身が

硬直した。

その瞬間、ぴしりという氷の割れるような透明な音が腕の中の卵から聞こえると同時に、ジワリと生暖かい液体が手に伝わってきた。

…ええ、見た通りです…

振り返ることもできずに心の中でつぶやいた。

卵を抱きつぶしたところです。

4話 孵化

「何者だ？」

カツカツと背後からこちらに向かって近づいてくる靴音が建物内に反響する。

誰何の言葉が聞こえてはいたが、私はひびの入った卵を抱えて振り返ることもできずにただ立ち竦むことしかできなかった。というよりも、少しでも動いたら、卵が割れてしまいそうで動くに動けなかった。

「貴様、言葉が聞こえぬのか？」

苛立ちを含んだ声色にぐくりとつばを飲む込むと、腕の中で再びピシリという音が聞こえた。恐る恐る腕の中を伺うと、広がった卵のひびの隙間から覗き込む爬虫類と再び目が合った。先ほどまで卵がぐらぐらするほど暴れていたというのに、なぜか今は私と同じようにぴたりとその動きは止まっている。先ほどまでの状態の違いに、狐につままれた気分为数回瞬きをすると、爬虫類も同じ数だけ瞬きして返してきた。

妙に自分とシンクロした爬虫類の動きに軽く親近感を覚えて、瞬きのコミュニケーションを思わずとってしまったのは、自分の置かれた状況も忘れたからではなくて忘れたかったからだったけど…

その時、私の髪が、不意に吹いた強い風に靡いた。

「何を持っている」

怒気を孕んだ男の声が、私のすぐ背後で聞こえて驚いた。

先ほどちらりと見た扉は、かなり遠い場所にあつた筈だ。それこそ全力で走つてきたとしても、声が聞こえてから今に至るまでの短時間でここに辿り着くはずがない。

しかし、今はそんなことを考えている暇はなかった。いつ割れてもおかしくなくらいにひびの入った卵を何とかしなければならぬ。

「パス」

そう考えた私はすばやく振り返ると、背後の男（おそらく、爬虫類の飼育係）に腕の中の卵を手渡した。

「きゅるるる」

透き通つた氷の割れるような音と、水風船の割れたようなぱしゃりという水音、そしてそれらに一瞬遅れて、卵から孵つた爬虫類の小さな鳴き声が建物内に反響した。

…よし、成功…

いきなり渡されたひびの入った卵を飼育員の男が危なげなく受け止めた瞬間、その表面のひびが中を覆い隠すほどに広がり卵は割れた。遅かれ早かれ卵は割れていただろうが、素人である自分の手の中で割れるよりも飼育員の腕の中で割れたほうが対処もしやすいだろうととっさに判断した結果の行動だった。そのときはそれが一番ベストな方法であると考えていたが、冷静に考えれば卵が置かれていた

台座に置いたほうが卵としては安全だったと今更ながらに気が付いた。

「生まれただと？バカな、確かに宝卵^{いし}になった筈」

落とさなくてよかったと内心冷や汗を流している私の前で、飼育員と思われる男がひどく驚いた顔をして、生まれたての爬虫類を抱いていた。

飼育係はやけにきらきらとした男だった。端正な顔には黄金の瞳が収まり、癖のある硬そうな金髪が顔の周りを彩っている。背の高さは2mはあるだろうか。黒のズボンに膝まである上着を身に付けており、服の上からも逞しい筋肉の存在が見て取れた。

…しかし、その恰好は爬虫類の飼育には向いていないんじゃないかな…

10人中9人は格好良いと評するであろうその飼育係が身に纏っている上着は、金系により細かい刺繍が施されている。彼の腕の中にある爬虫類は鋭い爪を持っており、その装飾を簡単に解れさせるだろうことは想像に難くない。しかも、よりもよってそのベースの布は汚れやすい白色だ。事実、割れた卵に入っていた赤く透明な液体をその裾からぽたぽたと垂らしている。

しかし、飼育係はその事には全く頓着していない。というか、孵化した爬虫類に夢中で気が付いていないようだ。先ほどから、感動の対面を邪魔するのも悪いかと話しかけるタイミングを計っているのだが、爬虫類の飼育にかなり熱心なようで全くその隙が見当たらない。

…しょうがない、何か拭くものを持ってこよう…

飼育係の卵に服が汚れた原因は、どう考えても私が割れかけの卵に
を手渡したからである。その事に多少の後ろめたさを感じて、タオ
ルを渡そうとスポーツバッグの方に足を向けた。

5話 躊躇

卵の鎮座する台座の裏に置いてあったスポーツバッグの底のほうからタオルを引きずり出していると、再び強い風が吹いた。

「何をなさっているのです？」

耳に心地よい落ち着いたアルトの声が突然響いた。その声の主がいつの間に現れたのかはぜんぜん気が付かなかったため、思わず体がびくつと反応してしまった。

人の気配に鈍感ではないはずだが、いきなり真後ろに立っていた飼育係にも気が付かなかったし、自分では自覚していないだけで実は鈍いかもしれない。これまで闇の精霊がほとんど傍に付いていて、唐突に現れる精霊たちに彼が先に気が付いたのでそんなことは感じなかったのだが…あまりにも鈍いので見るに見かねて教えてくれていたのかもしれない。

少しへこみながらタオルを手に振り返れば、台座の下から飼育係の濡れた足元の近くに白い衣が近づいてきていた。ここからでは足元しか見えないが、髪を足元まで長く伸ばしているようで、束ねた青い髪が尻尾のようにゆらりゆらりとゆらめいているのが見える。

精霊たちを先に見ていたのでそこまで驚かなかったが、どうやらこの世界の住人も精霊たちと同じようにカラフルな髪の色をしているようだ。光の精霊は金、闇の精霊は黒、火の精霊は赤、水の精霊は青、土の精霊は茶、風邪の精霊は淡く緑がかった銀色の髪と瞳を持っていた。初めて会ったときに地球上では見ることもなかったその色とりどりの髪と瞳の色をした彼らに、驚いたのと同時に異世界だなあと実感したのは記憶に新しい。

もしかしたら、金髪の飼育係は光の、新たにやってきた青色の髪の

人物は水の属性を持つのかもしれない。

「この場所で遊んでいる暇はないはずですが」

落ち着いた中にも優しさを滲ませたその響きで、その声の主が飼育係と親しい間柄であろうことが容易に推測できた。そのため、なんとなく空気を読んでしまい、姿を現すのを躊躇ってしまう。

「ぎよるるる！！ぎゅぐるる！！」

しかし、生まれたての爬虫類に空気を読むスキルは備わっていないかったようだ。二人のほんわかとした空気をぶち壊すような、爬虫類のまったく可愛くない鳴き声と同時に、飼育係の激しく動く衣擦れの音が聞こえてきた。

「うわっ！！なんだ？」

どうやら爬虫類は飼育係の腕の中で激しく暴れているらしく、それを落とさないように抱きとめているようだ。

「幼竜？まさかそんな！？」

鳴き声が聞こえた途端に飼育係の元へ駆け寄ってきた青髪の人が、信じられないと言わんばかりに驚きの声を上げる。

「見慣れぬ子供が卵石を抱いていた。探せ」

青髪の人の驚く声に被せるように飼育係が命令する。

一瞬、どこかに子供がいたのかと思いきよるきよる辺りを見回してしまっただが、子供の姿はどこにもない。

——見慣れぬ子供って私！？

状況から推測すると私のことを指している可能性も考えられるが、
とつくの昔に成人式は済ませて四捨五入すれば30歳になる身として
は自分の事を指しているのか自信がない。確かに海外に出ると曰
本人は総じて若く見える例に私も洩れてはいないが、さすがに子供
に間違えられたことはない。精々、成人前後だ。それに、探せもな
にも私は隠れてはいない。タオルを取り出すためにスポーツバッグ
のところによつと移動しただけだ。あの二人からは、実質2mも
離れていない。自分が出て行って、お前じゃないよ子供を捜してい
るんだよ、みたいな視線を向けられたら恥ずかしくて立ち直れない
気がする。

「その者の特徴は？」

「肩までの黒髪に、大きさはちよつと小さめ」

出て行くべきか、ここで状況を見守るべきか判断がつかないままタ
オルを握り締めていると、青髪の人物の声に応えるようにして後ろ
から新たな声が聞こえてきた。やはり、今回も欠片も気配を察する
ことができずにびくりと肩を強張らせてしまう。

「そうだ」

「お嬢ちゃんの目の色は…珍しいな、黒か」

ぐいつと肩を引かれ仰け反った視線の先に赤い髪の男がいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4503t/>

世界樹の継枝

2011年10月6日13時10分発行